

第六章 西海町の天災・地変

一 江戸時代

台風銀座といわれ、台風の通路となっている西海町には、古来いくたの災害が記録されている。記録にある災害をたどってみる。

延宝四年七月二日と三日、風雨御荘各地流れる。

延宝八年八月二十一日 閏八月五日、洪水田畑被害多し。

元禄七年九月 福浦氏神社殿造営棟札に、当社御大守公左京様御建立遊ス処、発西歳大風拜殿破却仕ス処、御公儀ニ申上不得者、先氏子〇而仕〇〇〇清出拜殿成就仕者也、福浦中。

享保十七年三月二十日、長月村、内海村四ヶ村、飢食、大麦百五十俵下さる。

宝暦四年九月十八日、御荘津島洪水にて被害。

安永七年六月二十八日、御莊水害 死人あり、七月八日又洪水あり。

辰巳屋永代記によれば、文政四年八月朔日、洪水致し、内泊後の山中泊道上に従いくずれ落つ。

弘化三年丙午、七月九日四ツ頃より、九ツ迫、大風雨、大洪水、

船越瀬の浜にて全所舟、網舟共に武拾艘ばかり被害、中泊にも少し、幸十郎家空より抜けて家倒る、人には怪我なし、宮の山の大木並に所々の大木倒る。

全月十九日の夜、明けより大風雨洪水致し、御城下田地大損に付、御領中、貧民為、救御用金被仰付、武貫目差上げる。
(辰巳屋永代記録より)

嘉永五年、外海村久家失火、四戸を残すのみ。

嘉永七年甲寅十一月五日、昼七ツ時より大地震い出し、其の上大津波御城下表、御城ならびに御家中、町内大潰家数軒有之候、怪我人も少々有之候、この大地震、しばらく震い治り、又昼夜少々あつて、一時の間に三、四度も、ゆり出し、三ヶ年間程は、少なれども鎮不申追々静に相成申候。

右大地震は諸國に有之、隣国土州高知ならびに宿毛方、格別の大震、潰家数軒、其の上出火、猶津波に付、潰焼流れ大変の事と承り候。

其の内、当浦にも津波候て、三四尺程上り道場(寺)の庭先まで浪先参り昼夜共二、三べん差込み候。

其の内御庄組在中にも格別の事無之候得共、貝塚村、新田に大潮にて一丈五六尺上り、流家も少々有之趣、無怪我人候、右様に大変なれ共、当地は西側の方石垣の方石少々くずれし事ばかりなり。

右大變の時は、流家は潰る事有之候故、茅にてかり屋致し、板などの処、十四五日も畑中、宮の社内之行候者有数人。

其の内、右宿も方承り、今様に成時候は火の用心、又肝要也(辰巳屋由来記原文のとおり)

この時、鹿島の南「うどびら」の山浜に向つて大崩れあり(現在もはっきり見ることが出来る)、其の他下久家、津浪により、下ノ谷全滅。住民は現在の中ノ谷に移る。船越八人洞の大石落下船越の東、おといの浜にその巨石現在す、以来八人洞は入口を失い今に至る。

安政六年、外海村内泊に悪病流行

この模様を現代風に潤色して再現すると、次のようになる。

さんさんと照る七月の午後、五十石積みの辰巳屋の持船若栄丸が、静かに由良下に姿をあらわし、それが次第に大きくなって内泊の湾内に全ぼうを見せたのは、安政六年、今から百五十五年も前のことである。

若栄丸が久しぶりに上方から帰ったという事は、船主や加子の妻子はもとより、浦全体の喜びであったにちがいない。当然のことのように浦人たちは、若栄丸の出迎えるために浜に集まり、上方からの土産や情報を期待して、あれこれと想像を交えながら噂し合っていた。

しかし、そうした期待や喜びは、無残にもうち砕かれてしまった。

接岸した若栄丸の乗組員の表情は、いちように暗く、出迎への歓呼に対しても、相応の反応を示さなかった。

それもそのはず、船主市左衛門の子万兵衛が、猛烈な下痢をおこし、重態となっていたのである。

船から、背負い降ろされた万兵衛の憔悴しきった様子を見て、浦人たちの喜びや期待は、たちまちのうちに不安に変わってしまった。

万兵衛は、焼きつくような高熱にあえぎながらころりと死んでいくために、「コロリ」の異名で呼ばれている「コレラ」にかかっていたのである。

浦人たちの不安は、真相が知れるにつれて恐怖となった。

七月十二日の万兵衛の死に始まって、十五日、十六日……二十四日と毎日のように一人ずつ死んでいった。

二十六日には、父と妹を失った一家を初め、源蔵、杉松、久三郎、スイと六人もの死者が出た。

浜田善三郎（親方）の家では、家族四人を失ってしまった。

こうしたパニック状態の中で、七、八十戸の浦人のだれかれもが、仕事に手がつかず、ただおろおろして悪夢のさめることを願っていた。

医療機関がなく、衛生知識の乏しかった浦人たちは、楠の木のおがくずを頭にかぶり、「コロリ」に染まらぬことを願ってひたすらに病魔から逃れようとした。たとえ、それが迷信であろうとも、なすすべを知らぬ浦人たちは、そうするよりほかに道がなかったのである。

悪疫が死者の体内から出ることを恐れた浦人は、死者をただちに酒樽に入れ、ふたを厳重にめつぶして外氣と隔てて土葬した。

月を越した八月十六日頃、さしもの悪疫もその猛威を終えんし、二か月にわたる苦難が去ったのである。

昭和三十四年、内泊ではこの時の死者の百年忌法要が次々に行われた。

万延元年 福浦失火二戸を余す。

以後明治までの間記録なし

二 明治・大正・昭和時代

明治二十九年八月十三日、西外海村船越、五十余戸焼失。

明治二十九年八月十三日の昼ごろ、船越の中心地帯から火の手があがり、五十余戸を焼く大火事となった。

火元や原因は不明だが、現在の和田の家の近くで、目近節の火入れからの失火が原因ではなからうかといわれている。

当時の家は、ほとんど茅葺屋根であり、そのうえ消防ポンプなどがなかった時代だから（木製の手押ポンプは、大正になってやっと久家が購入）、たいした風がなかったにもかかわらず、火はみるみるうちに広がり、遂に、現在の朝日屋あたりから、中道筋に至る幅で、西の越までの中心街を見事に焼きつくしてしまった。

ます屋と呼ばれていた畔地栄助の家は、内泊の太鼓網の宿をしていた。

「たまたま網が下手（船越湾のこと）に廻っていた時なので、網仕事をしていた水夫の連中が、「そりゃ大事ぞ、うら手から火の手が上がったぞー」

と宿元にとんで帰り、倉から手に手にむしろを持ち出して海の中につけ、それを屋根の上にかぶせた上に、肥樽で海水を吸み上げてはうちかけたという話が残っている。

これに類した話に、お寺の防火状況がある。自分達のご先祖がいるお寺を焼いては申し訳ないと、浦中絵出のように人が集まった。ます屋のように海が近くにないのだが、自家用の井戸があり、それに大男で力持ちの堂守、松井一

百が居た。

松井は、つるべで水を汲み上げるまどろこしさに、自から四斗樽を抱えて井戸にとび込み、両手で差し上げては運び手に次々に渡したという。

このような人々の働きで、ます屋やお寺は被害を受けなかったが、焼けた家は大変だった。

元区长山下良吉は、当時五才で、母親の背中におぶさっていた。火事がやっと治まった夕暮、伯母にあたる松田善次郎の姉が来て、一物も取り出さず焼いてしまった悲しみを、涙とともに語っていた姿と、角ランプがともっていた印象を、今でも思い出すという。

明治四十二年八月、高知県沿岸に出漁せし西、南宇和郡の漁民暴風のためてん覆、死者・行方不明五十三名。

大正三年七月二十四日、二十五日台風襲来、二十五日午前三時頃から急に風が激しくなり、夜明には風雨はますますつのるいっぽうであった。

夜明時に、久家の宮山が茶褐色になったと思うと、異様な地ひびきが起こって、一抱えもある大松が根こそぎに倒れた。

また、三丁の大錠でつなぎ止めていた、久家清水の鯉船が、錠をひいたまま陸上に飛びあがった。大竜巻が起きたのである。

陸で建造中の神山の鯉船は、「かあら」の上に置いてあった八十キロもある石とともに、中野利義宅の前に吹き落とされた。

この旋風は下久家へのび、新築後の池田政五郎宅をひとつぶしにしてしまった。

政五郎の妻は、家の下敷きとなり、三男も吹き飛ばされて即死した。妻の遺体は、柱を鋸で引き切って取り出したという。

人々は、今でも、この台風を政五郎台風とよんでいる。

同じ下久家の中野銀次郎宅は、戸という戸を吹き抜かれてしまった。防風強化用に雨戸ぎわに積み重ねていた畳が、重なったまま越田の池の土堤まで吹き飛ばされたといい、畳の間にしまっていた三十円の札が、そのまま畳の間にはさまっていたという。

この台風のすさまじさをうかがうことができよう。

大正九年六月三十日（武者泊部落全滅）

朝から激しい雷雨が続いていたが、午後三時頃になると、さしもの雨脚も遠のき、五時には東の空に虹が立つのを見た人もいた。

部落の人々は、蘇生したように雨戸を開け、すさまじかった雨脚が尋常なものでなかったことを語り合って、夕食の仕度に取りかかった。

夜になると、ようやくあけていた空がまた怪しくなり、遂に大降りとなってしまったが、そのものすごさは、昼間の雨に輪をかけたものであった。

「大だらいの水を、頭の上ではねくり返したようなものだった。」と、今でも語り伝えられているから、たいへんな降りようだったのであろう。

午後十時頃、本谷の中腹あたりで、腹の底に泌みとおるような地鳴りがすると同時に、山の「ズイ」が抜けたからたまったものではない。

谷添いの急斜面に家を建てて住んでいる部落である。またたくまに、流れおちて来る岩石にうち倒され、土砂に埋まってしまった。

暗闇の中で逃げまどう人達の中には、泥水に押し流されるものもあり、一瞬の中に、あびきょうかんのるつぽと化す大騒動となってしまうた。

翌日の午前三時頃になって、やっと山津波がおさまり、夜明けの頃には、さしもの集中豪雨もうそのようにやみ、青空がのぞいていた。

武者泊部落は、歴史が始まって以来の大災害を受け、惨胆たる状態となったが、不思議なことに一人の死者も出さなかった。

これは、不幸中の幸いというべきであり、部落民は、お互いに無事を喜びあった。

福浦の猪崎保直は、武者泊の惨状を聞くと、とりあえず手持の白米三俵を船で送った。

当時の武者泊は、猪崎家の小作をしていたので、その関係で白米を送ったのであろうが、何ととっても、情の深い人柄が座視を許さなかったのであろうと、語り伝えられている。

猪崎家から救援米が届いたものの、炊事のできる家は、田原京太郎、和田源次両家だけであった。

時の戸数五十戸の中、四十八戸が炊事の火もたけない程の被災をしたのだから、部落は、文字通り火が消えた状態となっていたのである。そこへ届けられた救援米であるから、地獄で仏の気持ちがあったのは当然のことであろう。

災害で一番こたえたのは、唯一の共有財産であり、生活手段であったキビナゴ網を流失してしまったことである。

このことを知った時の臆議、面地平一（船越の人）は、早速、県庁に駆けつけて災害救助を要請した。その結果、生活の目途を失った部落のために、面高網一統の権利の無償配布を受けることができるようになった。

話を聞いた部落の人々は、勇氣百倍、氣をとり直して復興に励んだという。（この網をもとに、部落全株主方式による武者泊新網が生れる下地がつくられた。）

前町議畑部又宣は、災害のようすをこまごまと話してくれた後に、「現在の武者泊は、鉄筋の家も珍らしくなくなり、丈夫な砂防ダムも完成しているので、二度と、あの時のような惨状を見ることはあるまいが、あの夜のおそろしさは、一生涯私の記憶から消えることはないだろう。」としみじみ語っていた。

大正九年八月十五日台風（記録坂本成之による。坂本は佐世保海軍防備隊勤務、二等水兵の時代——夏期休暇中）

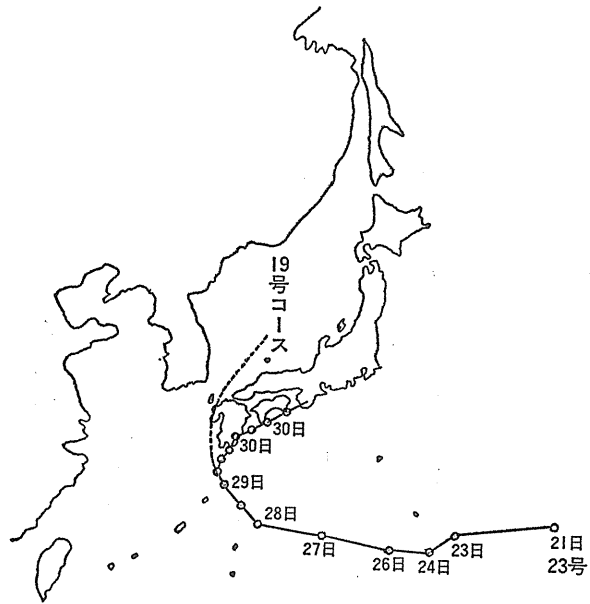
八月十四日 晴

八月十五日 雨 昼前から車軸を流すような雷雨となる。

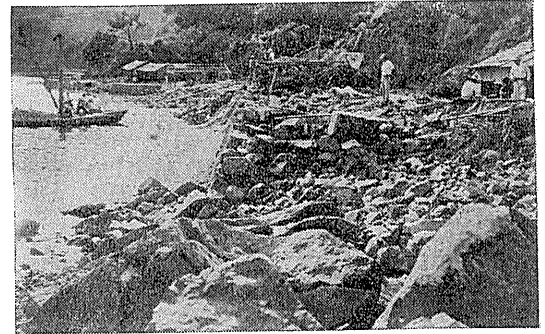
浜田惣太郎方に夕食をよばれ、食事中前の小川が水一杯となり、帰宅のためその橋を渡り終わると、水音と共に橋が流れ、通行不能となった。浜田善一庭に難を避け、吉田龍一宅の石垣をよじ登って伯父の家に裏から入る。伯父の家では防水のため、父子、兄弟必死に流れこむ水を防いでいる有様、この作業に夜十一時まで必死に助力した。

家に帰ってみると、宵のうちに和田内の伯父後藤一家が家をおし流され、私の家に避難していた。

流勢増々強く、山本黒市一家は、家に流れこむ水に、遂に病中の黒市を近隣の人にて救援中、黒市の妻は二歳になる子供をかかえて濁流を渡るうち、力尽き、子供を行方不明にして、やっと人々に救出されるという有様、麦ヶ浦一帯、瀧の水の落つるにまかせたという惨事であった。



昭和四十六年八月二十一日 台風二十三号
二十九日正午の位置は、先の十九号（八月四日午後六時）と同じ位置。
其の後、九州西岸を十九号と同じコースを進むものと、予想せしに、二十九日午後六時急に東よりとなり、十一時五分佐田岬上陸、三十日午前六時日向灘、此の頃より勢力稍々衰え、示度九七〇、風速三十米、当地方午後三時—六時、南東、南々東の風九、猛烈に吹く、されど十時風力弱まる。中心は近くを通過せるも（柏島付近）あつけないほど、風力弱く、午後三時足摺より土佐湾へ。
五時風西となり、吹きに吹く、被害大したことなし
(坂本の手記原文のまま)



護岸崩壊

山は崩れ、川溝は土砂で埋もれ、家の柱も宙ぶらと大打撃、麦ヶ浦が開かれて以来の大惨事であった。

内泊より青年団三十名が加勢に来てくれて、土砂の取り除きにあたった。十七日帰隊の日であったが、この風雨のため海陸の交通止まり、駐在巡査に証明書をもらって、翌日やっと、帰隊の途についた。

このように、年々歳々天災、地変が西海町を襲ったが、大正の終わりから、昭和の初期にかけては、確かな記録を集めることができなかった。

昭和に入ってからには、ラジオ、テレビによって、正確な予報を受けることができるようになり、台風に対応していけるようになったので、台風被害は減少している。

明している。以下、坂本の記録を掲載する。

昭和三十九年九月十九日—二十五日

台風二十号の天気図

昭和四十四年八月十五日発生台風九号

台風九号二十二日午前九時四十米、さつま半島西部に上陸、更に日向灘に、夕方五時H三十米、宿毛市より東に太平洋岸を東北東に、当地方北東の風強烈三H—五Hの間最も強く—三十米以上。

我が部落東組の屋根瓦大半飛ばされたり。此の台風進行速度早やかりしたため不幸中の幸なり。

※ 自 昭和二十六年四月
至 昭和三十二年三月
六ヶ年間 平均

雨		晴		降 水 量	温 気	
計	雨天日	曇天日	晴天日		平均	最低
30	6	8	16	214.4	14.63	9.67
31	15	8	8	244.5	18.72	13.65
30	12	4	14	366.7	21.52	17.37
31	8	4	19	284.0	25.03	22.40
31	6	3	22	190.4	26.84	22.72
30	12	11	7	272.4	23.92	19.49
31	7	6	18	96.6	18.60	13.50
30	2	8	20	92.4	14.25	9.54
31	2	12	17	84.9	10.18	5.63
31	8	9	14	67.9	7.65	3.53
29	7	3	18	149.4	8.45	4.46
31	9	7	15	123.7	10.30	5.43
日 365	94	83	188	計 2,192.3	“ 16.67	“ 12.28

気温・降雨量・晴雨

最	高	4月	5	6	7	8	9	10	11	12	1	2	3	平均	平均
19.56	23.79	25.41	28.21	31.09	28.35	23.90	19.06	14.75	11.37	12.45	14.93	平均	21.90	計	

(南宇和地区病害虫防除所調)

平均	計	“ 三十一年	“ 三十年	昭和二十九年	家 住
9,384	28,153	—	5,871	22,282	家 住
4,543	13,629	—	2,345	11,884	家住非
152	455	—	—	455	地 田
6,742	20,230	1,500	370	18,360	路 道
317	950	—	—	950	梁 橋
980	2,940	440	—	2,500	防 堤
17,455	52,365	425	9,097	42,843	岸 護
1,801	5,404	—	850	4,554	堤波防
16,512	49,535	—	1,270	48,265	舶 船
4,325	13,075	—	2,050	11,025	物作農
1,387	4,162	—	1,080	3,082	物産海
5,648	15,943	70	1,100	14,773	他のそ
69,047	207,141	2,435	24,333	180,373	計
		一 五 二 号	二 三 二 号	一 五 号 一 二 号	考 備

颱風による自然災害の状況

(西海町役場調—単位千円)